

『冬をいきいきと』

今年の冬も教育委員会主催のスポーツ推進事業「冬休み子どもスキーレッスン」が開催されました。この事業は、スキーの技能向上と自然の中での行動の仕方を身に付けさせること、そして、体力づくりの場とすることを目的として、小学1年生から4年生までの希望者を対象として例年行われているものです。

今年のスキーレッスンに参加した江差の子どもたちも昨年の子どもたちと同様、元気いっぱいいきいきとした表情を浮かべながらスキー場にやってきました。今年の天候はやや気温が低く朝から雪が舞っていることが多い状況でしたが、集まってきた子どもたちは、寒さや雪をまったく気にすることもなく、はやる気持ちをおさえきれないといった様子でした。

さすがスキーレッスンに参加希望した子どもたちです。やる気ムンムンで私たち講師陣の大人たちは子どもたちの気迫に圧倒されそうでした。しかし、子どもたちの勢い任せにはしてられません。何と言ってもスキーは安全第一、事故が起こらぬよう、怪我をさせぬよう我々大人が十分に配慮しなくてはなりません。

子どもたちのはやる気持ちにブレーキをかけつつ、どのような場合に事故が起こるのか、どのように自分の身を守るのかなどそれぞれの子に危機感を持たせることが重要です。

一回の話の中では、危険回避の全てのことを教えるのは無理なことです。あらゆる場面で機会をとらえながら「ここで、こういう場合はとても危ないんだよ」などと伝えるようにします。

スキーに怪我はつきものという思いを強く持ったのは、私が現役教師だった頃、受け持っていたグループの男の子が、傾斜のとてもゆるいスロープで横にパタンと転んでしまった結果、すねの骨を折っていたということがありました。極めて遅いスピードで倒れた瞬間も特段足がもつれた様子はなかったのですが、すでに立ち上がることができなくなっていたのです。このことがあってから、スキー指導に携わる度にこの時の思いが頭の中に蘇ってきて、ついつい子どもたちへの話がくどくなってしまうのかもしれません。

しかし、子どもたちへの注意を促す話を数多くしたからといって、事故というのは起きる時に思わずして起こるものです。スキーの魅力は、安全に楽しく滑ることにあります。事故や怪我を防ぐためには、話だけではなくて、実際に滑ることを通してスキーの技術を身に付けなければなりません。安全にすべるための基本は、滑っている時のスピードコントロールにあります。スキーの先端をせまく後ろを広げるといったボーゲンの形で滑ることが有効です。また、止まりたい時は、右か左にスキーをターンさせ斜面に対して横向き

にして、スキーが前や後ろに滑らないで止まる位置を体でおぼえるということも大切です。これらのことが上手になると、滑降中にスピードが出過ぎて怖いと思うことが少なくなります。また、自分に合ったスピードで自分なりの滑り方を身に付けていくようになります。そのためには、傾斜のきつくない雪のしまり具合のよい緩やかなスロープで、スキーの両側に体重をのせた時、片方ずつに体重をかけた時のスキーの動きを体でとらえながら、できるだけ滑る回数を多くし、スキーの操作に慣れることが大切です。

4日間のスキーレッスンですが、参加した子どもたちのスキー技術は、初日と4日目では見違えるほど上手になります。もちろんスキー競技出場選手のようにかっこよいとまではいきませんが、最終日の七飯スキー場の一番上のスロープから安全に滑って降りてくる子どもたちが多かったです。また、午後からはやや吹雪気味で気温もマイナス11度ほどとなったため、やや視界が遮られ、顔面の冷たさに耐えながら滑り降りることとなりました。子どもたちは「これ以上吹雪いたら怖いね」などとつぶやいていましたが、冬の山の気候の厳しさを体感できたこと、このような事態に備えるためにはどうすればよいかを考えるなどよい勉強になったのではないのでしょうか。

一昔前のスキー場に比べるとスキー人口が本当に減ったなあと思います。日曜や祝日などは家族ぐるみのスキー客でスキー場の混雑は相当なものでしたが、今はリフト乗り場で列を作って並んで待つということもなくなりました。また、雪の中で転げまわったり、雪を積んでかまくらづくりをしたり、雪合戦をして走りまわっている子どもたちの姿をめったに見ることもなくなりました。

このような状況になんとなく寂しさをおぼえていたところでしたが、スキーレッスンに参加してきた子どもたちと4日間を過ごす中で、寒さにめげずに冬を楽しみたいという頼もしい子どもたちがまだいたぞという安堵感を味わうことができました。